

宮地和幸： コブノヒゲについて

褐藻類，コブノヒゲの形態及び生態の観察結果を報告した。本種は寒流の影響する北海道太平洋沿岸の室蘭から納沙布まで分布している。本種は数種のコンブ属及びネコアシコンブの再生葉体の上部にある，前年の古い葉体の主に子嚢班の部分に着生し，2月から6月上旬まで採集されており，宿主の古い葉状部が消えるとともに消失する。今回初めて本種の複子嚢を観察した。複子嚢は従来記載された同属の他の種のそれと同様に表層の栄養細胞から作られる。単子嚢・複子嚢はいずれも生育期間中常に観察されるが，複子嚢形成体は単子嚢形成体に比べて極端に少量しか観察されない。単子嚢・複子嚢はそれぞれ別の体に形成されるが，時には同じ体にも形成される。(274 船橋市三山2丁目2-1, 東邦大学理学部生物学教室)

千原光雄： フェルドマン先生の思い出

Mitsuo CHIHARA: Jean Feldmann, 1905-1978

フェルドマン先生 Prof. Jean Feldmann が9月18日にお亡くなりになったとの知らせをパリ大学から受けた。享年73歳であった。先生は二度来日された。一度目は第11回太平洋学会議が東京で開かれた1966年で，二度目は第7回国際海藻会議が札幌で開かれた1971年である。最初の来日の夏の二ヶ月程前にフェルドマン先生から一通の手紙をいただいた。会議の始まる少し前に日本に着き，あなたのいたことのある下田臨海実験所に一週間程滞在して海藻採集をしたいのでよろしく配慮を願いたいとの趣旨であり，なお夫人を同伴する予定で，できれば日本式の生活を味わってみたいので，和室のある旅館を世話してもらえると有難いがとの希望が添えられていた。よく知られているように，夫人もまた藻学者で，とくに紅藻イギス科の海藻について秀れた研究をされている。羽田には，フランスでお知り合いになられた三輪和雄先生も出迎えられた。

フェルドマン先生の下田での海藻採集は実に精力的であった。あいにく，この年の8月は台風が日本近海に長逗留で，海は必ずしも静かではなかったが，先生は殆ど毎日採集に出かけられた。ある時は雨合羽を着て，また傘をもつての採集もあった。先生は恵まれた体格で，それに若い頃から海で鍛えておられるせいもあって，波のある中を胸まで浸かって小島に渡ることもなども再々で，既に60歳を越しておられたが，少しも年を感じさせるところがなかった。先生は沢山海藻をとられ，それからつぎつぎと海藻の名前を私に尋ねられた。第一日目の採集を始めて間もなくアミジグサがとれた。問われるままに *Dictyota dichotoma* と学名を答えた。すると先生は首をかき上げて，地中海のものと少し違うように思うがと言われた。私ははっとして，それからはヨーロッパに *type locality* をもつとされる海藻についてとくに注意して採集し，逐一意見をいただくように努めた。このことは私にとって貴重な体験であり，種の階級の分類を全世界的な視野で行うことの重要性を改めて強く感じさせてくれた。採集中の先生は楽しそうで，須崎半島で無節サンゴモのサビモドキ (*Yamadaea* SEGAWA) を見つけられたときの嬉しそうな顔，白浜海岸で波のぶつかる岩壁に生育するハチノスイシ (*Lithophyllum tortuosum* = *Tenarea*

tortuosa) を，打ち寄せる波しぶきを避けながら幾枚も写真をとられたときの後姿などは今も鮮かに私の脳裏に浮ぶ。ハチノスイシは生育の様子が先生がお若い頃に研究された Albères の海岸のそれによく似ていたので，とくに興味をもったとのことであった。

フェルドマン先生ご夫妻は下田での日常生活も楽しんでおられた。夜はゆかたにうちわで畳の上でくつろがれた。ときに，臨海実験所前では赤いいちご水のかき氷を注文して舌鼓を打たれ，また具合よく時期であった下田名物の夏祭を楽しまれた。

先生は採集物を沢山とられたが，その後始末は実に丹念であった。標本の一つ一つを手にとり，顕微鏡で見るべきものはその都度セクションをつくり，ノートにメモを取り，それから袋にしまわれた。遅くとも大抵はその日のうちにすまされたが，時には夕食を遅らせることもあった。私は採集物の整理の仕方を改めて学ぶ思いがした。その後，太平洋学会議の会期中に，日本藻類学会主催の海藻採集会が一日江の島で行われ，多数の外国人学者が参加され，その採集物の整理が宿泊所のホテルニューオタニに近い上智大学で行われたが，この時も多くの人々が帰った後に遅くまで残って採集物の整理に精を出す数名の中にフェルドマン先生の姿があった。

フェルドマン先生は若くして Albères の海岸の海藻について大冊の研究論文をまとめ (1937-1942)，さらに *Gelidiella* を初めとする多数の新属，新種の記載，カギノリ科を含め，多くの藻類の生活史の研究，管状緑藻や褐藻あるいは紅藻全般に亘る分類系の提唱など，秀れた研究論文を多数発表された。また先生は永年パリ大学の海洋植物学の教授として多数の研究者を育成され，さらに創始者の一人として国際藻類学会，フランス藻類学会などの設立にも尽力され，両学会の会長の要職を経るなど，藻学の発展に大きい足跡を残された。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

筑波大学生物科学系 (300-31 茨城県新治郡坂村)

Institute of Biological Sciences, The University of Tsukuba, Sakura-mura, Ibaraki-ken, 300-31, Japan.

Jap. J. Phycol. 26(4): 170